

Title	座談会 日本における唯物論研究の歴史と東京唯物論研究会
Author(s)	中村, 行秀; 北村, 実; 平子, 友長; 嶋崎, 隆
Citation	唯物論 : 東京唯物論研究会会報, 81: 6-26
Issue Date	2007-11
Type	Journal Article
Text Version	author
URL	http://hdl.handle.net/10086/16442
Right	

【座談会】

日本における唯物論研究の歴史と東京唯物論研究会

創立六〇年（二〇〇九年二月）を迎えるにあたって、東京唯物論研究会は、唯物論研究の歴史を振り返り、今後の活動の展望を切り開くために、「日本唯物論史研究部会」（略称：「唯研史部会」）という特定テーマの研究會を設け、日本の唯物論史の持続的な研究に着手した。

読者と共に、激動の時代を生きた日本の唯物論者の活動を考えるべく、本誌『唯物論』は、唯物論と東京唯物論研究会の歴史を基礎的に概括する座談会を行った。この座談会での議論を、本号（前編）と次号（後編）に分載する。

（前編）

出席者（発言順）：中村行秀（千葉短大名誉教授：唯研史部会座長）

北村実（早稲田大学名誉教授）

平子友長（一橋大学教授）

島崎隆（一橋大学教授）

【戦前の唯物論研究について】

中村： この座談会は、日本の唯物論哲学の展開をたどりながら、東京唯研の創立とその後の活動について話し合う、というのが主旨ですが、雑談的になるのを避けるために、日本の唯物論哲学は、戦前の「唯物論研究会」から現在に至るまで、いわゆる「マルクス・レーニン主義」哲学とのかかわり（受容・批判・克服）で展開されてきたという観点を軸にして、話し合っていきたいと思います。

戦後の研究史といっても、戦前の唯研の活動と、そこで展開され普及されてきたマルクス・レーニン主義哲学を簡単に特徴づけた上で、戦後に入らなくてははいけないでしょう。

唯研の発足の一九三二年一〇月という時期は、ソヴィエト共産党におけるレーニンの段階の論争が、スターリン派の勝利という形で決着がつく時期と重なっています。そういうこともあって、いわゆるマルクス主義哲学の「レーニンの段階」、つまり、「哲学の党派性」の問題、「弁証法、論理学、認識論の三者の同一」という問題が、唯研の哲学の人たちの中では研究のメインテーマみたいな形になったということがあります。たとえば、三者の同一性の問題は、『唯物論研究』創刊号（一九三二年十一月）の永田論文「運動の論理としての弁証法の特色付けについて」からもう始まっています。そして、松村一人、船山信一、沼田秀郷、本多謙三たちによって、三六年二月四〇号まで続きます。唯研の解散は三八年の二月ですから、ほとんどずっと続いていたと言っていいわけですね。

それから党派性の問題というのは、有名な第六号、翌三三年の加藤正論文、「我が弁証法的唯物論の回顧と展望・・唯物論研究会に寄せる覚え書き」というので始まっています。いずれにしてもこのレーニンの段階というのは、スターリン派によれば、マルクス主義哲学、つまり弁証法的唯物論を、新しい高度な段階に引き上げた、ということで評価され、宣伝されます。唯研内でも、加藤正とか戸坂潤などの一部を

除いては、そのようなものとして受け取られてきたのだと思うのです。

又、戦後になっても、森宏一、寺澤恒信など、いわゆる正統派マルクス主義者は、レーニンの段階に達したマルクス・レーニン主義哲学こそ我々が継承すべきもの、と高く評価しています。

たとえば、森宏一さんの『唯物論の思想と闘争』下（一九七一年、新日本出版社）、これは編集に北村さんも加わられた論文集ですけれども、そこにこういう叙述があるんですね。「一九三〇年の前後に、ソ連邦でマルクス主義哲学についての二つの偏向を論題とする論議が行われ、その際に、マルクス主義哲学におけるレーニンの段階が強調されて、二つの偏向の克服が行われた。この論争とその経過が伝えられた丁度その時に、唯物論研究会が発足したということになる。このことでこの会のマルクス主義哲学研究者たちは、哲学におけるレーニンの段階なるもの、つまり哲学におけるレーニン主義について大きく目を開かされ、レーニンの哲学における重要な意義に注目するきっかけを得、その著作『唯物論と経験批判論』の研究が精力的に行われた。」と。

これは戦後に書かれたものですが、それでも、「レーニンの段階」なるものに対する非常に高い評価であった。寺沢さんにいっては、もう三者の同一性を抜きにマルクス主義哲学は語れない、というふうに書いているわけです。「重ねて言うが、私がこの小論で述べた方針に従って研究を進めるのでない限り、マルクス主義哲学研究の理論的水準を高めることはできない。」（「弁証法・認識論・論理学の統一」）と。このように高く評価されているわけですが、先ず、北村さんから、唯研で論争されたレーニンの段階に関してちょっとお話を伺いたと思います。

北村： まず日本の唯物論研究は事実上、唯研の創立から始まったと言ってもいいと思います。それ以前にプロレタリア科学研究所があり、多少のマルクス主義哲学の研究が行われました。それほど成果は上がらなかったで、事実上は、唯物論研究会から始まったと考えております。

ただし、唯物論研究会には二つの方向があったと思います。一つは、戸坂さんに代表されるような、内発的、自主的な探求の努力で、日本精神主義に対して、科学的精神を対峙させて戦った成果は大きく評価されて当然だと思います。他方、中村さんからも指摘があったように、ソ連で展開された哲学におけるレーニンの段階論争に呼応する形で、レーニンの哲学的な評価を非常に強調することが、出発点から行われました。そこでは特に、弁証法・論理学・認識論の同一性の問題がかなりのウエイトを占めていたと私も思います。唯物論研究会の光と影で言えば、このレーニンの段階というのは影に相当すると思うのです。光は、何と言っても、戸坂を中心とした日本精神主義との思想闘争の方にある。私はこれを日本の唯物論研究の非常に大きな成果だと思うんです。

さてその影の部分ですが、弁証法・論理学・認識論の同一性を巡っての色々な議論がありました。実は三木自身、同一性という言い方よりも統一という用語を既に使っているんですね。ですから寺沢さんのお書きになったものも、弁証法・論理学・認識論の統一というふうになっています。この同一性と統一には微妙な違いがあります。ドイツ語で言えば、同一性は *identität* ですね。統一のほうは、*Einheit* で、意味が違います。永田廣志は、文字通り弁証法と論理学は同一であるから、そこに差異を指摘するような見解はブルジョワ哲学への譲歩であるとまで言っています。

ちょっと永田廣志の文章を読みますと、「弁証法、論理学と認識論をその同一性において捉えることに重心を置かず、その差別を見出すことに没頭したり、又は弁証法的に理解された同一性には差別が必ず内在するという見地の下に、この三者の同一性と同時に、その差別を見出そうという試みはその動機のかんに関わらず、この三つのものの間に内容上の区別を設け、それらを互いに独立の科学と見なすブルジョワ哲学への譲歩であることは明白である。」と主張しています。けれども、これは三木が主張しているよりも、遙かに同一性ということ強調し過ぎているというように思います。私自身は後になってそ

ういう考え方に到達したのですが、三者は内包、外延とも異なると思うんです。しかしこの三者の核の部分は重なっているのだから、同一ではなく、統一というふうにとらえるべきだと思いますね。

たとえば論理学一つとっても、弁証法的論理学だけではなくて、非弁証法的な形式論理学というものがあります。これは後になって、形式論理学論争になるわけですが、この当時は形式論理学を否定的にしか見なかったものですから、やむを得なかった面もあるけれども、論理学一つとっても弁証法と重ならない部分と重なる部分があるわけですね。弁証法は認識論とかなり重なります。しかし弁証法には自然の弁証法とか、社会（歴史）の弁証法、思考の弁証法、という三つの弁証法があるとされていますが、思考の弁証法はもう完全に認識論と重なるし、また論理学とも重なりますが、自然の弁証法とか社会・歴史の弁証法というのは存在論的な性格を持っているわけですから、これはやっぱり認識論と論理学とは重なりません。従って私はレーニンの間違いだ、明らかに行き過ぎだと思うんです。ヘーゲルの弁証法の積極的な読み替えとして、弁証法と論理学と認識論は核の部分が重なっている、だから統一的にとらえるべきだということであれば、私はいいと思うんですけれどね。

レーニンの単純化した見解を、永田廣志の場合は文字通りもっと単純化していると思います。ソ連でもずっと議論が行われましたけれども、スターリン批判後の六〇年代後半から七〇年代にかけては、形式論理学の位置づけの問題が議論されますが、その前からもそういう議論が民科の中で行われていて、山田宗睦さんが「論理学の新しい課題」というのを『国民の科学』に書いているんですよ。これはなかなかよく論理学の新しい問題を認識してしまっていて、僕は山田さんはこういうのはあんまり得意ではなかったと思っていたんだけど、意外と言っては失礼かも知れませんが、非常によく理解しています。中村秀吉さんの報告などを引き継いで、形式論理学の位置づけの問題が、ソ連をはじめマルクス主義陣営で大きな問題となっているということをやっと認識されているんです。その後のソ連と東独で行われた論理学論争など、そういう成果から見ると、永田廣志の理解は非常に未熟だったと言わざるを得ない、と今は思います。これについては平子さんもどんどんお書きになっていられるようですね。

中村：「レーニンの段階」の中身に深入りすると、それだけで時間が一杯になってしまうので、評価をズバツと出したいと思っています。平子さんどうですか。

平子：レーニンの段階については島崎さんに発言してもらおうとして、話を面白くするためですけども、北村先生の、「日本のマルクス主義哲学研究は唯研をもって始まる、それ以前は既に歴史はあるけれども、見るべき成果はなかった」というお話に対して、私は全く正反対です。つまり、今日目から見て、日本のマルクス主義哲学研究の良質な部分は、むしろ一九二六年から一九三〇年までの、僅か四～五年の間に、急速に成熟し、かつ急速にその発展の芽が奪われていったと、そういう見方があります。

そのメルクマールを申し上げます。結局、一九二〇年代の三木清を巡る論争、三木清と服部之総ですが、ここでは、マルクスの文献に依拠したマルクス哲学の研究をするかどうか、それから唯物論一般としてのマルクス主義ではなく、二〇世紀の哲学としてのマルクス主義ということが大いに問題になります。

スターリンの政治的勝利に伴って、そのイデオロギーとしてミーチンらの哲学が成立する。その旗印は、マルクス主義ではなく、マルクス・レーニン主義であった。これが、党派闘争の踏み絵になったわけです。そうすると勢いマルクス・レーニン主義というときのレーニンが強調され、それが哲学のレーニンの段階の提唱になり、レーニンしか主張していない言説に焦点が合わさってくる。党派闘争の踏み絵としての役割を果たすために、マルクス・レーニン主義は、他のマルクス主義哲学者との共通項よりも、レーニンしか主張していない主張によりどこを求めて行く、ということにならざるを得ません。結局、全体として日本もまた、イデオロギー闘争の過程でスターリン派が作り出したイデオロギーに引きずられていく。ただし、戸坂という人の著作を見ると、マルクス・レーニン主義の基本的な論争に拘束されることが著しく

少ない言説を、死ぬまで展開している。これは、ものすごく貴重な遺産であると思います。ちょっと乱暴な議論をしましたがけれども、そんなふうには考えています。

中村： 今、平子さんから、唯研の発足とともに始まったマルクス・レーニン主義の受け入れが、むしろマルクス主義哲学の発展する芽を奪ったというんですか、押さえ付けてしまった、だからレーニンの段階というのは、マルクス主義の発展にとってはマイナスであった、という指摘があったと思います。島崎さんはどう思いますか。

島崎： 平子さんがお話しになった三木・服部論争については、大分前に読んで非常におもしろいと思いました。あとで問題になりますけれども、三木はこの当時すでに実践的唯物論に接近していて、マルクスのオリジナルに依拠してやってきたと思うんです。それに対して服部は唯物論一般の立場からアプローチしていますから、この段階では、三木の方に正当性があったと思います。もちろん三木の考え方も、たとえば「主体的唯物論」であるとか、いろいろ言われて、十分のものであるとは言えないと思いますけれども。積極性はあったのではないのでしょうか。

哲学のレーニンの段階という場合に、哲学の党派性や弁証法・論理学・認識論の同一性が言われていましたけれども、その他にも、帝国主義的な段階での新しい哲学の段階だと言われました。それをスターリンとか、ミーチンが権威づけて承認し、その当時の党内の党派的な闘争と絡んで、新カント主義とか、マッハ主義などを批判していく。哲学の著作としては、『唯物論と経験批判論』、その後書かれた『哲学ノート』ですね。今だと、その二つの著作の質的な違いはかなり明らかになっていると思いますが、当時は、まだその区別はあまり見られていない。そして大々的にそれらが宣伝されたということです。

哲学のレーニンの段階では、当時、自然科学が発達してきて、たとえば物質は、電子などの集まりではない、という量子力学というようなものが出てきます。その時に、偉大なるレーニンが、自然科学の位置づけとか、あるいは物質を唯物論的・哲学的にどうとらえるかということで、「物質の哲学的概念」を言ったと。さらに、「対立物の統一と闘争」が、弁証法を中心であると言ったとか、これらのことが通例列挙されます。

弁証法・論理学・認識論の三者の同一性については、寺沢さんがこれを非常に強調されたし、たとえば、仲本章夫さんなんかこの問題を一生懸命やられていたと思うんです。これがどこから出てきたのかということを引きちんと文献的に見ていくと、『哲学ノート』でヘーゲルの『大論理学』をレーニンが読解するなかで出てきたわけです。『大論理学』というのは弁証法的に展開されていて、しかも形式論理学をアウフヘーベンして形成されてきたもので、あとは、まあ、従来のいろんな形而上学的考え方を内包しているという意味での新しい論理学だというわけです。そうすると弁証法と論理学は一致しているし、同時にそのなかで、世界というものを有論・本質論・概念論というような展開のなかでとらえるから、認識論ともなり、真理の深まりがあると。僕は、だから三者の同一性と言うのは、実はヘーゲルの論理学について言ったんだというふうにとらえられるべきであるのに、そのコンテクストを離れて、一般的な形で言われてしまったんだと思います。

僕は、『ポスト・マルクス主義の思想と方法』という本を書きました。ソ連・東欧の社会主義の崩壊というものを眼前にして、深刻に反省しなくてはいけないと考え、幅広く批判的に解明していくということでもずっとやってきたわけです。実践的唯物論の立場にコミットした場合、この三者の同一性の問題それ自身がマルクス主義哲学の中心課題であるというのは、誤っていたと思います。結局、認識中心の考えは、レーニンだけではなく、エンゲルスにまで遡ります。

弁証法・論理学・認識論の統一の問題というのは、広義の認識論の分野の問題です。しかしもっとそれ以上に、この世界をどうとらえるのか、自然があつて社会があつて、その領域にまたがって人間がいる。

その人間が実践的、現実的にですね、他の人々とも、自然とも対応しつつ、社会の中で、活動をしている。そのことの全体性をどうとらえるかということがまず大事だと思います。もちろんそこに、認識論が役に立ちます。

たとえば、エンゲルスが、「唯物論的弁証法」というのは、自然・社会・人間の思考に共通する法則性、運動し発展する法則というものをとらえるんだということを言ったと思います。しかし、もっと具体的、現実的な世界というのは、そういうふうに抽象的にとらえられるものではない。つまり、「弁証法的唯物論」というのを好意的に解釈するとして、これは一個の、人間の生き方を含んだ世界観だと思うんですね。

「自然弁証法」は、マルクス主義の基礎としてあるとは思いますが、やはり人間というのはどういうふうにして、自分たちの社会を発展段階的に、歴史的に形成してきたのか、という「史的唯物論」の考え方が核心になっていかなければいけない。人間はそのなかで認識的な活動というものをやっていくわけですが、狭義の認識論の問題として、三者の同一性という問題が出てきている。それはあくまで部分領域です。ところが、何となく「弁証法的唯物論」と「唯物論的弁証法」が同一視される。同じになって、認識論や方法論が、マルクス主義哲学のなかで一番大きな課題だというように言われてしまう。そういうところが、非常に大きな弱点だったという風に僕は考えています。

もう一つ党派性について、ちょっと触れます。社会主義だったら、まず党というものがあって、党派性ということで、自分の研究が自由にやれなくなり、党派性・階級性によって縛られる。そうすると結局、社会主義の国家だったら、今までもその面がありますが、真理・事実が言えず、自由な学問研究であるはずのものが、階級闘争とか、イデオロギー闘争の中に入って行かざるを得ない。そういうイデオロギー闘争の中で勝ったものが、「真理」というものを担う。後の人は追放されたり、粛清されたりします。

これでは本当に、「真理というものは権力なり」と言う、あのニーチェとかフーコーの「真理＝権力論」というものにかかなり近い状況が出てくると思うんです。だから今でもですね、左翼的な立場で学問をやる場合に、外部の政党とか、また社会主義国家である場合には、国家というものがどういうふうに関わりうるのか、というところを見ていかないといけない。その辺の問題は、実は今でも解決されていないんじゃないかと思います。

当時のマルクスたちの立場だったら、一種の哲学的な共産主義というものを説いていったと思うんですね。だからマルクスの時代だと、やっぱり宗教を信仰するのとマルクス主義を説くということとは矛盾している。だけれども今だったらそんなことはないわけです。極端にいうと、宗教を信じている人も、共産党員になれるし、そういう人が幹部になるということも有り得る。だから党派性とか階級性とかの呪縛から解放される、解き放たれて、どういうふうにして自由な学問ができるか、ということを考えます。そこからあらためて、学問と党派や階級の関係が問い直される。これは非常に微妙な問題です。現代の資本主義の中でも、左翼政党などに関わった場合には、この問題はまだ「つまずきの石」みたくなっているんじゃないかという気がしています。

中村：レーニンの段階といわれる二つの主張ですね、これは今から見るとおかしいんだということですが、一つには、平子さんがレーニンの段階というものを「踏み絵」に使ったというふうにおっしゃいましたけれども、それが事実のようです。

あの有名な「哲学及び自然科学赤色教授学院細胞の決議」のなかで、デボーリンに代表される反マルクス主義の本質というものを三点挙げています。一つは、実践からの理論の、政治からの哲学の分離というものです。二つ目は、哲学の党派性というレーニンの原理を貫き通すことの完全な拒否。三つ目は、レーニンについては、一般に理論家としての、とくにマルクス主義哲学者としての彼の意義を低く評価すること。政治家としては一級、しかし哲学者としてはそうでは無いという評価。これは大体プレハーノフ派な

んかのレーニンの評価ですね。これらの主張のように、レーニン主義段階を認めないのはダメなんだと、こういう形で踏み絵に使われています。

それからもう一つは、レーニンがマルクスの哲学を引き上げたってという主張はおかしいということです。レーニンがそういうものを書いているとき、『経済学哲学草稿』、『ドイツイデオロギー』、それから『グリントリッセ』、エンゲルスの『自然弁証法』など、マルクスの「哲学」について一番大事だった文献が出版されてないですもんね。そういうものを読まずに、マルクスを引き上げたってというのは明らかにおかしい。

そこで、マルクス・レーニン主義という哲学の本質は何だったのか、という問題に移りたいと思います。

平子： さっき私は、二六年から三〇年までの三木対服部論争のことで二点指摘しました。けれども、重要な論点を一つ忘れていました。

それはつまり、哲学の根本問題は存在論なのか、認識論なのかということなんですね。服部は認識論なんです。つまり真理を先ず自分が真っ先に捉えたという言説を作ることが、権力を掌握し維持する上での一大事であるから、認識論が根本問題になる。それに対して、三木もそうですけれども、戸坂ははっきりと、唯物論は存在論としてまず立たなければいけないとする。しかも、それは、存在一般ではない。ハイデガー批判などが出てきます。戸坂は、歴史的日常性の存在論を拠点とする唯物論を提唱します。ここに道徳論とか、風俗論に、結びつく原点があるんです。哲学の根本問題の地平は、認識論か、存在論かという論点が出されていたわけです。

北村： リヤザノフは、西欧諸国に残されていたマルクス文献を探し出してきて、『ドイツイデオロギー』、『経済学哲学草稿』等々の出版の功績をあげながら、追放されます。これはその後のソ連哲学の発展にとって大きなマイナスになった、と私は今思うんですね。部分訳ですけども、三木清がいち早く『ドイツイデオロギー』を出した。三木の功績は、私も評価します。

三木・服部論争について言うと、服部之総はもともと社会学を専門とする人で、哲学の素養というものはほとんどないんですね。歴史家としての服部之総を私は評価するけれども、この論争の服部は、全く評価しないんです。非常にレベルの低い理論だったと思うんです。では三木の方が良かったかということ、三木もやっぱり欠陥を持っていたと思うんですね。三木の唯物論の理解は、ハイデッガーの影響も受けていて、私は全体としてはやはり評価できない。ただ部分的には、評価するものがあります。それから三木は後になっても、マルクス主義の外からかなり貴重な意見を述べていて、そういう個々の発言では評価するものがある、ということを書いたことがあります。

三木たちのあの時代が日本の唯物論の誕生にとって不幸な出発になったのは、当時のプロ科の中の抗争で、三木がプロ科から追放されてしまい、プロ科には哲学部門が事実上なくなっちゃったことです。学生の松村さんが、ほとんど一人。あとで哲学者ということになりますけれども、永田は当時は哲学者じゃなく、もっぱらソ連の翻訳家だった。松村さんの話だと、プロ科では、哲学は一介の学生の松村さんしかいないから適当にやってくれということで、それでヘーゲルの論理学の唯物論的解釈というのを始めて、それがずっと戦争中まで続くことになります。しかも、マルクス主義というのは哲学の止揚だとして、マルクス主義には哲学なんてないんだ、という主張もかなり強くあった。そういう意味では私はあんまり唯研以前のプロ科は評価しないんです。

中村： ソ連の教科書類の精力的な翻訳、紹介等を通して、一九三〇年以降、マルクス・レーニン主義哲学が普及していくわけです。しかしそれは、マルクスに由来する現代唯物論とは相当に違ってました。それについてちょっと話してみたいんですけども。

まず、後藤道夫さんと中西新太郎さんと私が、東京唯物論研究会で書いたマルクス・レーニン主義哲学

の『マルクス主義教科書』の再検討です。そこでは、体系の構成にかんする特徴というようなものを別にすれば、その「哲学」観の特徴として二点あげました。その一つは、マルクス・レーニン主義哲学と言うのは、政治党派の哲学であるという規定です。有名なスターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』での「弁証法的唯物論は、マルクスレーニン主義党の世界観である。」という規定ですね。

もう一つは、マルクス主義哲学は一般的法則性の科学であるという規定です。そこでは党派的事であることが科学的だと主張され、党派性と、科学性というものが、媒介なしに一緒になっています。そうすると結局、主体と客体の実践的關係にかかわるようなカテゴリーは、全部哲学から抜けていくわけです。主体とか、個とか、意志とか、価値とか、感情とか、疎外とか。それからもう一つは、倫理学的部分、価値の部分も、抜けていく。そして人間の意識というものが、認識に還元されてしまうわけですね。感情とか情念とか感動とか意欲とか、そういうものも抜けてしまう。この二点が、マルクス・レーニン主義と言われる哲学の根本的な特徴であるというふうに考えています。この問題について少しだけ話し合ってみようと思います。

北村： 私も「ソ連哲学七四年の足跡」という短い論文で、マルクス・レーニン主義というのは、唯一の国定哲学、官許哲学として、政権党の政治的権威を後ろ楯に七四年間国民の頭上に君臨したんだと定義しています。「真理の独占」、これは東独崩壊後に人口に膾炙した言葉なんですが、つまり真理を独占する政権党に従わない者は、出版の自由も、教授の自由も許されなかった状況下に哲学があったということです。

私はソ連や東独の哲学を割合とザッハリッヒに研究した一人なんですけれども、特に東独の哲学については、相当細かいところも勉強しました。ソ連では事実上、党籍を持たない人は、教授にはなれない、しかも出版の自由がありませんから、党の許容範囲の中で研究する以外には生きるすべはなかったんです。しかしスターリンの死後、いわゆる雪解けになってくると、幾らか許容範囲が広がり、ソ連でも、東独でも、いろいろな新しい試みが、出てきます。

特に私が注目しているのは、ソ連の場合、雪解け後、認識論は非常に後退してしまって、倫理学研究がものすごい勢いで発展していくんです。倫理学ブームといってもいいくらいですね。それから、美学だとか、価値論だとか、自由論だとか。したがって、マルクス・レーニン主義哲学といっても、スターリン批判以前と以後では、様相がかなり違うんです。

許容範囲の中ですけれども、まじめに努力をして、それなりに自主的な研究も登場してきます。特に七〇年代以降ですけれども、私はそういうものを一生懸命勉強して、スターリン時代までのマルクス・レーニン主義とは異なる、ソ連や東独の新しいに動向を受けて、それなりに日本でも発展させようと努力しました。自由論についても新しい提起をしたし、価値論も早いときから手掛けました。単純に、マルクス・レーニン主義と言っていいかどうか。スターリン主義とそれ以降は区別する必要がある、という意見です。

中村： スターリン批判以後、マルクス・レーニン主義哲学の性格が変わったという説には同意できませんが、ともかく、戦後の主体性論争にいたるまでの日本の唯物論の主流では、マルクス・レーニン主義哲学の基本的特徴が科学性と党派性だと考えられていたのではないのでしょうか？

北村： もちろんスターリン主義の時代ですね。それなら、松村さんだって客観主義的唯物論という風に、批判しているくらいですから。

島崎： エンゲルスの『反デューリング論』ですけれども、「唯物論的弁証法」というかたちで、狭い意味での認識論の考え方が説かれる。それがマルクス主義哲学の全体に拡大されてしまっています。ですから、やはりマルクス主義哲学全体が何か真理を追究する認識論になって、方法論に狭隘化されるというか、それで現実的な哲学的世界観とは何ぞやということがいつまでも出てこない。

よく言われるのは、エンゲルスが大きく関わった適応説ないし拡張説です。まず広義の自然が存在する。

何となく漠然と社会も含めての。自然は、弁証法的なカテゴリーで、抽象的に捉えられ、何か一種の大きな自然観とか宇宙論になります。それを現実の社会とか歴史に当てはめると、史的唯物論が出てくると、こういう形で、マルクス・レーニン主義哲学が言われていたと思うんです。だったらなんで最初にある広大な自然観とかカテゴリー論が正当化されるのか。いわゆる西欧マルクス主義のルカーチ、シュミットとかそういった人達からは、エンゲルスというのは、最初にいわゆる宇宙論とか存在論を独断的に説いて、それを社会に適用しようとした、結局それは形而上学への後退ではないかというような批判がありました。その批判は正しいと思います。

平子： 一九八五～六年にかけて、一年間東独に暮らしたのですが、ゴルバチョフの登場というような事態が社会主義圏にとって何を意味するのかということ、すでに西側の人よりも早く、東側の人がかッチしていたと思える状況がありました。ものすごいカルチャーショックを受けました。

なぜカルチャーショックかという、こういう質問をされたんです。「西側にいる研究者であるあなたが、なぜマルクス・レーニン主義哲学だとか、マルクス経済学だとか、そんなものを研究するんですか。」と。それは、「私たちには体制の、ここに住む条件なんです。」と。

社会主義諸国の大学では、理科系の学生も含めマルクス・レーニン主義はすべて必修です。これに必要な全国の教育スタッフは膨大な数にのぼります。今日の中国がそうですが、これは一つの国家ビジネス、つまり権力の公共事業なんです。公共事業を維持するために、教科書が必要で、教員が必要で、その一番上にプロフェッサーがいる。戦前日本に、国体思想というものがありません。実際には信じてない人が多いけれども天皇は神であると、そう言わなければいけなかった。それと同じように、「マルクス・レーニン主義というのは、私たちにとっては、この国で、この権力体制のもとで生きていくための必須条件なのに、何でよその国で、そういう必要性のない人がわざわざこういうことをやるんですか」と聞いてくる。それはもう真剣な疑問なんです。

もう一つ。日本でも翻訳書の出ている東ドイツのいろんな著者と会いました。たとえば、『矛盾の弁証法』を書いたシュティラー、日本で翻訳書も出されているこの人に会ったときにですね、こんな風に言われました。「これは私の名前を出しているけれども、私が書いたんじゃないよ。」と。出版過程です、書き換えられちゃうんですよ。著者としてみれば、こんなのは私の著書でなくていいよ、という状態になって出るわけですね。

実際のディスカッションや授業などでの会話も、教科書通り行われているかと言えば、そうではない。つまり文書になると証拠に残っちゃう。あとで捕まっちゃう。教室では、ある程度自由な発言が行われています。時期によりますけどね。

つまり社会主義国の文献を読むときに、著者の書いた文章が編集者によって、著者の意志に反して書き換えられた文章を、著者自身の主張であると信じ、その上でこの理論の弱点は何かとか、ここにはどういふ問題があるのかとか、日本では大まじめにそれを引き受けて、学問的に議論してしまったのではないかな、という反省があります。

社会主義諸国では、哲学は政治の一部であって、まさに、党派性と科学性を一致させる。逆に言えば、権力を握る者は常に真理を独占している状態を維持しなければいけないという必要性から、国家ビジネスとして哲学が営まれている。このことは、その国に生きていく人々にとっては明々白々であって、政治の方便としてお付き合いしておけばいいことであつたものを、日本の場合には、命をかけてやってしまったということが、悲劇であり、また喜劇でもあつたと思うわけです。ソ連東欧の社会主義体制崩壊後、マルクス・レーニン主義哲学は、かつて東側世界に生きていた人々からも見捨てられてしまいました。この哲学は、結局、スターリン主義的な国家社会主義を正当化するためのイデオロギー以上のものではなかったと考え

ます。

北村： それはねえ、私は、西ベルリンに居たとき、しょっちゅう東に行っていましたが、だいたいみんな批判的だったですよ。悪口言わないのはブアーだけ。名だたる人はみんな批判的な悪口ばかり。だけど、彼らなりに努力はしていたんです。ですから、講義のときもテキストどおりのことではなくて、時々アドリブなんか言う。そういう時、学生が拍手したりしてね、ゼンザチオンだって言っていたけどね。理論活動なんかでは、徐々に許容範囲を広げるような努力を彼らもしてたんですよ。そういう点で非常に同情してたんなんです。

それから科学アカデミーの哲学研究所から追放された人たちを、私は一人一人呼び出してね、いろいろ話を聞きましたよ。ペーター・ルーベンだとか、カミーラ・バルケンだとか、追放された人を一人一人呼び出して、いろいろ話を聞きましたが、彼らなりに非常に努力をしていたんだ。それから、発表禁止になったイルリッツね。たくさん論文があるっていうから、僕が西側で出してやるよって言ったら、「それはまずい」と言って、結局僕に渡さなかったんですけどね。

国定哲学、官許マルクス主義の中でも、やっぱり良心的な人はいる。そういう人たちが、できるだけ許容範囲を広げようと努力をしていた。七〇年代から八〇年代にかけて、マルクス・レーニン主義の中でありながら、それを乗り越えるような方法を模索していた。ゲリラ的にそういうものを彼らは試みていた、と私は読み取りました。たとえば選択の自由の問題などを、シュティーターがちょっと言ってるんですよ。そういうのをヒントにして、私は選択の自由の問題などを後で展開するようになっていったんですけども。

島崎： 僕は三つぐらいに分類できるかなと思います。一つは、カーダー・フィロゾーフ（幹部哲学者）。これは全く宣伝のためにしか哲学をやらない。ほとんど研究能力はないけれども、権威は持っている。それと、例えばペーター・ルーベンなど二回も除名され、反体制的だと目をつけられている人もいましたし、僕の知っているヴォルフガング・ビアラスという人。この人は講義はしていますが、強力に監視を受けています。

さらに、党の中に収まってはいるけれども、ある程度学問的な研究を一つの範囲内で良心的でやっている人。ソ連でもイリンコフ、バチシチェフというような人にクリエイティヴィティがないかということ、そんなことないですけども、一応収まってやっていました。僕たちは旧社会主義国に根本的な問題があったということをきちんと見るとともに、制限された中で、研究がどういうふうに進展してきたかということを見る必要があります。その点は如何ですか。

北村： 私もそう思います。

中村： 日本で、マルクス・レーニン主義哲学教程がいろいろ翻訳されると、無論その本国においても、皆さんがそれを本当に信奉しているという感じで受け取っていたわけですが、事実はそうでは無いということで、おもしろい話です。

【主体性論争について】

中村： 戦後の話に移っていいですか？

戦後の唯物論哲学研究の問題としては、戦後問もなく開始された主体性論争があるわけですね。文献的には、四七年の『展望』二月号と一〇月号に掲載された梅本克己の論文です。「人間の自由の限界と唯物論と人間」に始まって、それへの反論として書かれた松村一人の「哲学における修正主義」（『世界』一九四八年七月号）、「哲学者の主体性論について」（『理論』一九四八年八月第六号）。これをもって論争が開

始されるわけですが、この二人の他にも、真下信一、高桑純夫などの民科の哲学部会の中心的メンバーを巻き込んだ論争があります。他に、季刊理論派と言われる三浦つとむ、田中吉六なども加わっているし、後に森宏一さんは、見田石介、山田宗睦なども主体性論に毒されていると評しているわけです。

この論争に関する一般的な性格づけでは、古田光さんの「主体性論争」という論文があります。それによると、主体性論争で取り上げられた問題というのは、必ずしも敗戦後の日本において初めて提起された特殊な問題ではない、ということですね。つまり、哲学の領域では、人間の社会的階級性とか、歴史の客観的必然性などを力説するマルクス主義の立場から、実存主義が強調するような人間の実存的個性や個人の主体性の自由性を、果たして正当に位置づけられるかどうか、もし可能だとすれば、それはいかなる論理においてであるか、という問題が論議されました。

こうした問題は、戦前戦中から、一部の哲学者の間で論議されていた問題であるとして、たとえば三木清による人間学的な立場からのマルクス主義解釈、「人間学のマルクスの形態」（一九二七年）ですね。これに対する戸坂、服部、加藤正などの唯物論研究会のメンバーによる批判などがあつた。主体性問題はその延長線上に出てきている、という主張なんですね。それについては、北村さんがこの論争の中心人物だった松村さんの弟子を自認されている（笑）わけですから、まずはその主体性論争の論点とか、評価などについて、一つお話しいただけますか。

北村： 主体性論争について私は「主体性論争の回顧」という論文（『哲学と人間』所収）を書いています。それ以前に、『現代の唯物論研究』に短いものを書いたときは、古田光さんの意見に同調して、やや主体性論争をネガティブに評価したんですね。古田さんはこういうふうに言ってます。「絶対優勢だったいわゆる正統派の人々は、主体性派の提供した解答を拒否すると同時に、主体性派の提起した問題そのものをも一掃してしまったのである。」と。つまり主体性派の提出した解答を拒否し、それからその問題を一掃してしまった、と。そういう解釈に私も同調しているんです。しかし末尾で、受け止め直さなければならない問題として、主体的自由の問題があつた、と書きました。高桑さんが主に主張していたのですが、要するに必然性の洞察だけでは、自由成立の十分条件と言えない。それは単なる必要条件であつて、客観的可能条件でしかない。それが真に自由であるためには、必然性の洞察が、自己の行動の自主的決定の可能性、すなわち主体的自由と統一されなければならない、という問題です。短い文章でしたが、高桑さんの問題提起の重要性について触れ、指摘したんです。

それから私は、近代文学の人たちのほうも、それから哲学のほうも、系統的に読み直しました。そして新しく論文を書いたんです。松村さんなど批判派のほうも、これまでの唯物論の欠陥を認めてですね、それを梅本さんとのやりとりの中で問題にしている、ということも改めて確認したんです。

たとえばこういうこと言ってるんですね。従来の唯物論というのは、客観主義になっていた。梅本さんの主張は、西田哲学の残滓があるからその部分は否定されなければならないけれども、問題そのものは重要なんだ、ということもかなり松村さんは主張しているんです。「単なる客観的方法ないしは科学主義というものが、これまでマルクス主義を覆っていて、主体的実践的なものが十分に顧慮されていなかったとすれば、それは克服されるべきもので、私自身にもその傾きがあつたし、自分でも克服していこうと思っているのです。ただし、その克服の仕方というものには、マルクス主義の正しい線に沿って克服する道と、何か超越的なものを持ってきて克服する道と、二つある。私は後者に反対する。主体を持ち出すにしても正しく持ち出さなければならない。歴史的主体として、現実的な人間主体を出さなければいけない。」と、松村さんは、このように唯物論の客観主義的傾向の克服ということも認めつつ、梅本さんの議論の中の西田哲学的な弱点を批判するという形をとってるんですね。

よく、松村さんが正統派の代表とされています。それはそのとおりのかも知れませんが、古田さん

の言うように、解答を拒否したとか、問題を一掃してしまったということではなくて、むしろ問題提起を受けとめ、唯物論としてもっと検討していかなければならないんだと主張していたんだと思うんです。

それから主体性論争というと、梅本対松村という一つの論争があったわけですが、もう一つは、真下さん、高桑さん、甘粕さん、明治大学にいた山田坂仁さんですね。高桑さんを除くと戦前の唯研のメンバーであり、高桑さんを含めて民科哲学部会のメンバーですが、こういう人たちの提起した主体性と言うのは、梅本さんと違うんです。梅本さんの議論とは区別して、私は、唯物論者の中から出てきた主体性論というのは十分に評価しなければならないと思います。

こういう議論を通じて何が出てきたかということ、客観主義の克服です。認識論主義という言葉は使われていませんけれども、戦前の唯研の中での認識論主義、客観主義の克服ということを目指して何人かの人たちが気づいたということですね。価値だとか、規範だとかいうものが浮上してきているんですけども、なおかつ、ためらいがあるんです。価値というと、すぐ新カント派の価値のことを連想してしまうらしく、価値・目的・規範というような表現に、少しためらいが感じられるんです。

たとえば古在さんなんかも、「もちろん過去の歴史を解釈する場合でも、現在の問題を分析する場合でも、一切の社会的関係、階級的対立を含めての基礎にやはり人間的なものがある。それは否定しませんが、ただその場合、人間的というのは、丸山（真男）さんの言うような価値意識とか規範意識であるとは考えない。」というふうに、古在さんは、価値意識とか、規範意識というものを否定してしまいます。そういう弱点が、あったと思うんです。松村さんの場合も、価値とか規範とかいうことを口にしながら、なおためらいがあるように思えます。

中村： そういうところに、マルクス・レーニン主義、つまりスターリン主義的な色が濃く残っていて、先ほど言った党派性と科学性というところに固執していくというような姿勢がある。主体性論争というのは、マルクス・レーニン主義哲学を克服するチャンスだったと思うんですね。いわゆる正統派と言われる人たちは、松村さんに対しても、どうも批判的だったと思うんです。それがやはり実らなかった大きな原因だったと思いますけれども。

平子： 私はやや距離を置いたものの言い方をするかもしれません。

一つは、梅本・松村論争を含めて、戦後の主体性論争は、明らかにゼロから始まったのではなく、戦前からの流れがあるという点です。その点にもう一つ付け加えますと、その水準は戦前レベルに到達していないということです。具体的に言いますと、やはり戸坂なんですよ。基本点ですけども、実践的唯物論の考え方からすると、哲学というのは、哲学するという生なんですよ。哲学という認識ではなくて、その活動は、一つの間人が生きていくということの本質的な一部です。営みとしての哲学です。ですから、哲学は、まずもって倫理性を持つんです。つまり、生きるということには不可欠に倫理性が伴う。だから、哲学の倫理性は本質的に出発点から伴う。認識論を適用して倫理学が生ずるのではなくて、始めから哲学には、倫理性がある。哲学の倫理性を原理問題として出したというのは、私はやはり三木と戸坂のラインだと思うんです。

だから戸坂は終生、道徳論を書く。つまり道徳論を基礎づけるという必然性は、原理問題としてあったということです。戸坂潤は、哲学の倫理性を広げて、結局人々をほんとうに説得できなければ、現実を変革するなどといっても、唯物論は口先だけだ。そこで戸坂が出してきたのは、哲学の主体性は日常性のレベルで展開しなければいけない、ということなんですね。

全体としてみれば、梅本克己の立場のほうが、戸坂のラインに接続していると思いますが、梅本の場合、人間の主体性が非日常的な営みとして考えられている問題を感じます。具体的に言うと、梅本が主体性問題を提起したコンテクストは、戦後の革命情勢に直面して、知識人がこの革命にどういう形で身を投ずる

かという問題状況が、主体性論争の暗黙の前提になっておりました。主体性というときに、朝起きてから夜寝るまで、それから、人々と共に日常生活を営む中で発揮される庶民的な主体性がいかにして第一級の哲学的問題になるかということは、ほとんど問われませんでした。革命運動に参加するときに、知識人は自由を捨てるべきか、否かみたいな議論になって、小ブルジョワ知識人だからそんなことを心配するんだ、労働者だったらそんな悩みはしないぞ、労働者だったら階級闘争にドーンと飛び込むんだ、それができないのが、小ブルジョワの弱さだというような言い方を、松村一人はしています。

全体として私は、戦後の主体性論争において主体性が論じられたアリーナが、やはり狭すぎたと思います。庶民一人一人に定位して日常性がいかに主体性に転移して倫理性を生成するのかを問う、という戸坂の構えよりは、はるかに縮減された場面で議論された。これが、第一の問題点ですね。それから主体性論争のときに、論争の両当事者が暗黙のうちにとらわれていたのは、階級闘争というものについてのある一義的なイメージです。つまり、共産党なり、ある政党の指導の下に行われる階級闘争が論争の共通の前提となっている。そこに潔く飛び込むかどうか、といった議論がなされていますが、階級闘争というのはどういう多様な形態をとるのかということ自体が、実は大変な問題であるのに、論争の両当事者が「共産党によって指導された運動だけが真の階級闘争である」という認識を共有していました。

知識人の参加する運動に対して、誰（共産党）が指導して、誰のイニシアティブの下にあるか、というイメージを前提して知識人の主体的自由の関係が議論される。ですから初めから、議論がなかなか生産的な方向に行かないわけです。主体性を問題にするんだったら、運動主体の形成の仕方、そこでのヘゲモニーのあり方、そこでの民主主義の問題、個人の人格の尊重の問題、そういう問題をまず議論すべきでした。そういうことを抜きにしてですね、主体性を捨てるとか、捨てないとかいう議論、あるいは主体性が生かされるのか否かという議論をしても、あまり生産的な議論ができない。

だからむしろ、階級闘争といわれる運動の中での、民主主義やその手続きの問題など、そういう議論をもっともっとみんながやるべきでしょう。かつ、本来からいえば運動のモトになる日常生活、つまり家庭の中とか、生活の作法とか、私たちの日常生活の卑近な営みをも含めて、主体性が議論されるべきであったと思います。これが戦前唯物論の到達点から、つまり戸坂の段階から見た戦後の主体性論争の問題ではなかったかと思います。

島崎： 僕なんか、サルトルなんか思い浮かべます。サルトルはもう、乗り越え不可能の哲学としてのマルクス主義を言いながら、そこに人間論や主体性みたいなものがないから、それをいわば自分の実存主義が補完する。やっぱり人間の本质は自由だと言う。ああいう問題なんかもかなり関わってきてるだろうなという印象は持っています。

中村： そういえば主体性論争のなかでは、全然サルトルの話出てこないですね。

北村： しかしね、背景には、あったと思うんです。この時期にはまだ翻訳がありませんからね。翻訳は私の高校生の頃で、『自由への道』が訳されたのは、二年生の時でした。松村さんが、「対象的認識の論理のみを示し、実践的認識および、実践の倫理を示し得ない客観主義的唯物論には、肝心の主体的側面が欠けている。ここから唯物論は、肝心の主体的側面を観念論にさらわれ、主観主義の助長を助けることになる」といいましたが、これが実存主義に持っていかれるんです。

中村： たとえば東京唯研の二五周年記念出版として出した本の中で、高田求さんは、主体性論争を「戦後マルクス主義の正当な指摘を含んでいる。」と言っているわけです。ところがいわゆる正統派の内部では、むしろ逸脱みたいな形で取られていって、立ち消えになってしまいます。それは一体何なのかということも、ご存知だったら。つまりこの論争が共産党から嫌われたからでしょうか。

北村： 『前衛』に文学のほうの主体性論批判の特集が載るんです。勝部元、甘粕石介、蔵原惟人が筆者

で、主体性論を「近代主義」「プチブル個人主義」と論難しましたが、哲学のほうの主体性論については、共産党から、特集号のような形での批判というのは出てないと思うんです。そこはちょっとワンクッション置いた方が良くと思うんですね。ただ後の東京唯研の中心になった何人かの人たちは、主体性論争に対しては、非常にネガティブで、客観主義的唯物論の方向へと、さらに押し進めるような論陣を張ったことは確かです。

中村： 主体性論に関して、前期と後期に分けて考えるべきだという論者が結構あるんです。

前期は、黒田寛一も含めて、少なくとも意図においては、西田・田辺哲学的観念論からマルクス主義へ移行する。あるいは小ブルジョアの立場から、労働者階級への移行を目指していた。その意味で、主体性論者とマルクス主義者の間では、批判と共同があり得た。ところが後期ですが、五五年あたりを境にして、主体性唯物論というのはトロツキズムと結びついていく。そして左翼的反共暴力主義イデオロギーになっていく、そういうふうな評価があります（福田静夫『『主体的』唯物論の哲学的基礎』）。

北村： 主体性論争というのは、四八年までで、そんなに後まで、尾を引かないと思うんですよ。後から登場したのは、田中吉六氏なんかですが、主体的唯物論と言われてはいますが、主体性論争の直接の延長線上じゃあないんです。ちょっと切れてますね。

中村： そうですかねえ。五七年一月に、日本トロツキスト連盟が結成され、その年の一二月に革命的共産主義者同盟というふうに改名されるわけですね。そこが結局主体性唯物論というものを掲げている。政治と直結させられて「連中のイデオロギーだから」という形ですね、主体性が流されちゃう。そういう歴史的事実はないですか。

北村： それは要するに黒田寛一のリーダーシップのもとに、「弁証法研究会」というのが組織されたんです。黒田寛一は、東京唯研にも入っていたし、その前には、民科哲学部会にも入っていたんですね。サルトルの影響が、非常に大きいといわれています。サルトルの影響を受けて、主体性の強調という方へ進んでいくんですね。それが、日本トロツキスト連盟になり、さらに革命的共産主義者同盟という政治組織に発展していくんです。

黒田寛一の右腕だったのが私の友人なんです、その後足を洗って某大学の教授になり、今は定年でおとなしくしてますけれども、それで私はかなり裏話も知っています。要するに黒田寛一という特異なパーソナリティを持った人が、サルトルなんかインスパイアされて、主体性ということに強くのめり込んでいく。同時に、スターリン主義批判というものと結びついて、反スタを合言葉に、政治的な運動へと乗り出していくのです。しかしそれは主体性論争とは、一応切れていると思うんです。時間的にも少し間があります。ですからそこを結びつけるのはどうかと思うんですね。

島崎： 田中吉六って出ましたけれども、田中吉六は、『主体的唯物論への途』とか書いて、『経哲草稿』など文献的にもオーソドックスに、マルクスに内在してとらえようとしたと言えると思うんです。

北村： そういったいいと思います。

島崎： 時期的にはいつの頃でしょうか。

北村： 黒寛が出てくるより、ちょっと前ですね。田中吉六のもとで『経済学哲学草稿』の訳が作られました。当時『経済学哲学草稿』の原書は、ほとんど見あたらなかった。ところが一橋の杉本栄一さんが、お持ちになっていたんですね。田中吉六さんは、日大の予科1年で中退した人でそんなにドイツ語ができないけれども、田中さんの所に入出入りしていた人が杉本栄一さんから借り出して、奥さんが全部タイプで打ち、それを翻訳したんです。田中さんがそれに手を入れて、最終的に城塚さんがさらに手をいれたのが岩波訳です。田中吉六という人は全く唯研とか民科哲学部会とかとかかわらないで、ニコヨンやりながら一人で勉強してああいう本を書いた人なんです。独自の問題意識の持ち主で、私なども、『主体的唯物論

への道』を読んで、非常に勉強になりました。黒寛なんかとは全く何の人的なつながりはないです。

島崎： 田中吉六は、三浦つとむとは深いつながりがある。そうしますと、田中吉六の段階で、一応マルクスそのものの文献に内在して、マルクス主義にある主体性みたいなものをちゃんと取り出そうという考えがあったと思うんです。それ以前は、文献に内在してということがあまりなかったんじゃないですか。

北村： なかったんです。唯物論研究会だって『経哲草稿』はほとんど取り上げていませんよね。戦後、最初にひどい訳が出て、哲学専門ではない人が訳したんで、哲学のタームが、とんでもない訳になっていて、まったく使い物になりませんでした。田中さん達のグループが、翻訳をしようということになって、テキストを探したんだそうです。なにしろメガだって、城塚さんが東大の図書館から借りてきて、学生の僕らは初めて見た、という状況ですからね。そういう意味で田中吉六さんの仕事は評価に値すると私は思っているんです。訳した人は小宮昌平さんという東京唯研創立以来の会員です。

島崎： 今だったら文献読解というのは当たり前のことです。当時は・・・。

北村： 田中吉六さんのところでね、何人かの人が集まってやってたというのは珍しかったのです。

中村： 一方の派に対する対抗意識というのが非常に強いから、協力しなかったり、とかそういうことはないんですか。

北村： そうではなくて、田中さんという人は、人脈がなかったんです。なにしろニコヨンで働きながら、夜、若い人を集めて勉強会をする形でしたから。

中村： 結局この論争というものが、日本における唯物論哲学の偏向、「ミーチン唯研的偏向」を正す絶好の機会であったわけですね。ところが、そうならなかった。さらに、マルクス・レーニン主義哲学の偏向が強まっていったと思われるわけです。その流れの一つとして、わが東京唯研が創立されていくわけですね。そちらの方に話題を移します。

以下次号（後編）へ